

中級日本語学習における生成 AI の効果的活用法：
作文支援と自律学習の取り組みから

Practical Approaches to Generative AI Integration:
Enhancing Writing Skills and Learner Autonomy in Intermediate Japanese Classes

青木裕美, ブリテッシュコロンビア大学
Hiromi Aoki, University of British Columbia

1. はじめに

生成 AI が広く普及してから 2 年以上が経ち、AI リテラシーはキャリア形成に欠かせないスキルとしてだけでなく、教育において学習者が身につけるべき重要な能力としても認識されるようになった (Conversation, 2025; LinkedIn News, 2025)。AI を批判的に評価し、責任を持って利用する能力を養うため、AI 学習目標を公式の学校カリキュラムに統合することは、学習者が AI に安全かつ有意義に関わるために重要であるともされている (UNESCO, 2024)。

しかし、AI リテラシーをどのように育てていくかという議論はまだ始まったばかりであり、その取り組みは国、地域、そして教育機関によって大きく異なるのが現状である。例えば、カナダ国内では、一部の州や学区がカリキュラムへの AI の統合を進めている一方で、教師へのトレーニングやリソースの提供が最小限に留まっている地域もある (Conversation, 2025)。このような格差は個々の教育者にも及び、積極的に教育に生成 AI の導入を図る教師がいる一方で、その活用に慎重な姿勢を示す教師もいる。山田 (2025) は、日本語教師の AI 使用に関する意思決定モデルを、「タイプ A: とにかく使ってみる」、「タイプ B: 利便性 (効率、教育効果など) が認識できれば使ってみる」、「タイプ C: 利便性は理解しつつも、操作容易性 (使いこなせるまでにかかる労力) に不安がある」「タイプ D: AI が組み込まれたツールが出たら使い始める (AI が使われていることを知る必要がない)」の 4 つのタイプに分類している。このような教師の多様な信念は、効果的に AI リテラシーの習得を促すための、実践的でエビデンスに基づいたアプローチの必要性を強調している。

教師と同様に、学生もまた、生成 AI の使用に関して様々な信念を持っている。ブリティッシュコロンビア大学 (UBC) で約 3000 人の学生を対象に行われた大規模調査 (UBC Centre for Teaching, Learning and Technology, 2024) や、2024 年 9 月と 2025 年 1 月に中級日本語クラスの学生を対象とし、筆者が行った調査では、AI の使用頻度や日本語学習における活用に対する態度に多様性が見られた (表 1、表 2)。生成 AI の利便性を高く評価する学生もいる一方で、多くの学生が AI のアウトプットの正確性に関する不安、過度な依存のリスク、倫理的懸念 (例: AI の使用を不正行為とみなされること) などを指摘している。

これらの学生の懸念は、生成 AI を効果的な学習ツールとして採用する上で大きな障壁となる。学生はこのような不安が払拭されない限り、自発的に AI を学習に利用しようとせず、その結果、AI リテラシーの育成が妨げられることになる。李 (2025) は、これからの教師の役割は答えを与えることではなく、学習者

が自ら答えを見いだすための案内者となることであると示している。筆者もまた、学生が生成 AI を効果的に学習に活用できるようになるためには、不安を軽減し、実際にその有効性を実感させることが重要であると考え、本実践に取り組んだ。

表 1 日本語中級クラスの学生を対象とした調査
(2024年9月、2025年1月に実施)

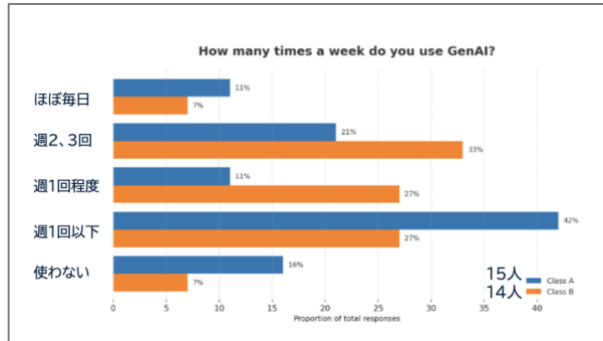


表 2 日本語中級クラスの学生を対象とした調査
(2024年9月に実施)

生成AIを日本語学習に使用することについてどう思うか			
Positive	6 respondents	40%	
Negative	3 respondents	20%	
Not sure	6 respondents	40%	

具体的には、中級日本語学習者を対象に、まずは作文支援において信頼性の比較的高い限定的な活用法を提示し、その効果を体験させることで生成 AI への懸念や不安を軽減した。続いて、学生自身の発想に基づき、それぞれの学習ニーズに応じた多様な活用法を試みさせることで、AI を自律的かつ批判的に用いる姿勢の育成を目指した。本稿では、この二段階の実践について報告し、AI リテラシー教育のあり方を考察する。

2.1 実践 1: 作文支援-語彙のフォーマリティーチェック

中級日本語のクラスでは、改まった書き言葉を使って文章を書くことを学び始めるが、学習者は特定の単語が改まった書き言葉として適切かどうかを判断することに苦労することが少なくない。そこで筆者はこのようなタスクを達成するためのツールとして、生成 AI に注目した。あらかじめ、改まった語彙を提案してもらうためのプロンプトを試行錯誤して作成し、それによるアウトプットが信用に足るレベルであることを確認し、作文課題の準備を行った。

作文の課題の一部として、学生に指定のプロンプトを提供し、作文支援としてその通りに生成 AI を使うことを指示した。

学生に提供したプロンプト:

I am an intermediate-level Japanese learner (CEFR A2). I am writing a formal essay.
I found the following word in a dictionary: 色々
Please could you tell me if it is appropriate for formal writing?

-If so, could you also show me the less formal versions of the word? If possible, I would like to see a few different options. It would be helpful to show example sentences with English translations.

OR

-If it is not appropriate for formal writing, please show me the more formal versions of the word. Show me a few different options if possible. Providing example sentences with English translations would be helpful.

このように極めて限定的な、しかも教師が提案する方法で生成 AI を使ってもらうことで、過度な依存への不安や倫理的懸念を払拭することを目的とした。

さらに、正確性に関する不安に対応するため、学生に生成 AI が提案した単語を作文中で使用した場合は下線で印をつけてもらい、それらの単語が改まった書き言葉に相応しい単語でなかったとしても、減点対象にはならないとを伝え、生成 AI の使用に関する心理的負担を軽減した。

提出された作文の中の生成 AI から提案された単語について、改まった書き言葉としての妥当性を日本語母語話者の TA と筆者が分析したところ、96%という高い精度が確認され、それを学生にも報告した。語彙の選択という面で学生の作文の質も向上し、添削の労力も軽減できたことは思わぬ副産物であった。さらに、その後の作文の課題でも、同様の生成 AI の活用を許可したところ、ほとんどの学生が生成 AI を使用し続けた。

2.2 実践 2: 生成 AI を使った自律学習プロジェクト

実践 1 では、信用性の高い生成 AI の活用方法があることを学生が知り、その効果を実感してもらおうという意味では価値のある試みであったと言えるが、使用方法を教師が提案しているという点では、学生が答えを導き出す案内者(李, 2025)としての教師の役割を果たせたとは言い難いであろう。そこで次の実践では、第二段階として、学生に自由な発想で、自身のニーズに適した生成 AI の活用を模索させる自律学習プロジェクトを行った。

このプロジェクトでは、学生が各自で学習計画を立て、一学期に渡り生成 AI を活用した日本語学習を実践するものである。プロジェクトの到達目標を、「日本語学習における生成 AI の活用法を批判的に分析できる」と「実践経験を日本語でわかりやすく簡潔に発表することができる」とし、例えば実践が失敗に終わったとしても評価には影響しないことを明示した。

さらに、二週間に一度、LMS の掲示板に簡単なレポートを書くことと、クラスで学習の進捗状況や成果、または失敗体験をグループで共有することを求めた。

これは、過去の実践で、生成 AI 使用の熟達度には学生間にかなりの差があることが確認されたことから、お互いの経験から生成 AI の効果的な活用方法を学べる機会を作ることを目的としたものである。また、学生がある程度生成 AI の使用に慣れた段階で教師との面談を行い、学習成果や問題点について話し合い、教師から問題解決のための指導を行い、学生が求める答えを見つけるための案内役を担った。学生が立てた学習計画は、漢字、文法、会話、リスニング、発音、コロケーションなど、それぞれの学習ニーズは多様であることがうかがえた。

3 考察

学期末にプロジェクトを振り返るアンケート調査を行ったところ、学生は生成 AI を活用した日本語学習には概ね肯定的であった。具体的には、多くが日本語学習のための生成 AI の活用について、プロジェクトを通じて認識が肯定的に変わったと答えた（表 3）。さらに生成 AI の使用は日本語学習に効果的であると捉え、今後も日本語学習のために生成 AI を使い続けたいと考えていることが明らかになった（表 4、表 5）。

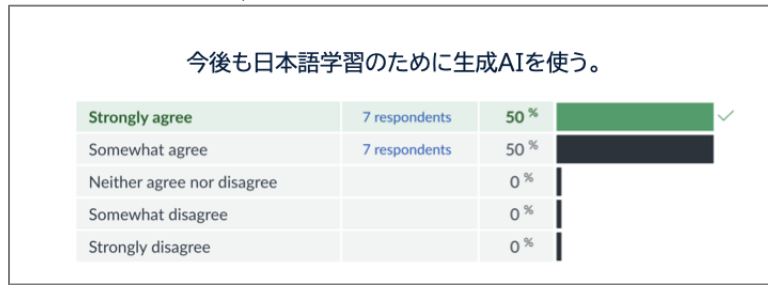
表 3 プロジェクトの振り返り調査 (1)
(2025 年 4 月に実施)



表 4 プロジェクトの振り返り調査(2)
(2025 年 4 月に実施)



表5 プロジェクトの振り返り調査(3)
(2025年4月に実施)



また、プロジェクトで行った活動の有用性についても、掲示板やクラスでの経験共有、教師との面談のいずれについても、生成 AI の活用を模索する上で有効であったとする回答が多かった（表6、表7）。

二つの実践を通じて明らかになったのは、AI リテラシーを育むための出発点として、まず学習者が抱く生成 AI に対する正確性や倫理的懸念に基づく不安を軽減することが不可欠であるという点である。実践1では正確性への信頼をある程度獲得でき、実践2では自律的かつ批判的に AI を活用する態度を涵養することができた。

ただし、過度依存のリスクや環境負荷といった問題は依然として解決すべき課題として残っている。今後は、学習者が生成 AI の長所と短所を見極めつつ、学習戦略の一つとして柔軟に取り入れる能力を育成する必要がある。

表6 プロジェクトの振り返り調査(4)
(2025年4月に実施)

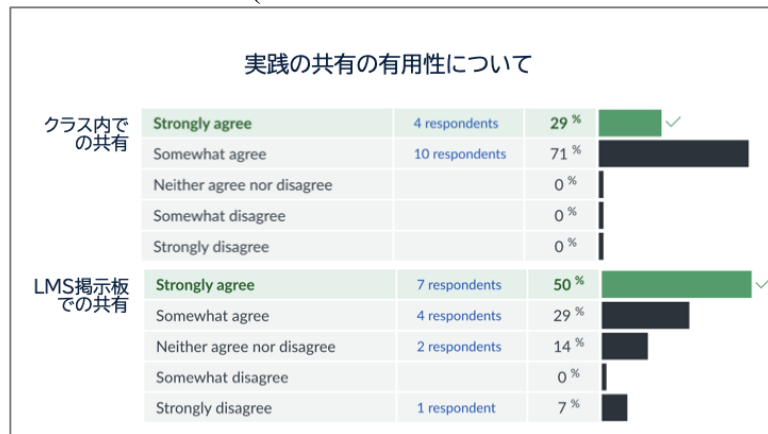
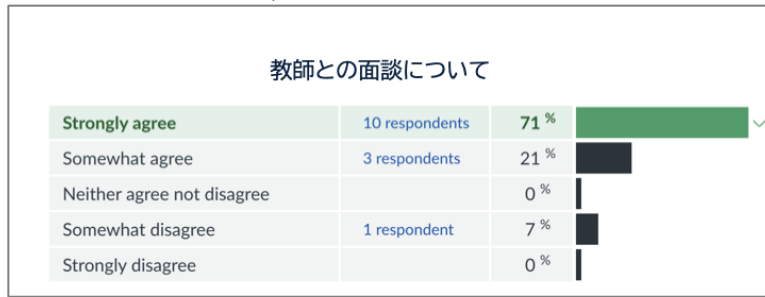


表7 プロジェクトの振り返り調査(5)
(2025年4月に実施)



4. おわりに

本稿では、中級日本語学習における生成 AI の効果的活用法を作文支援と自律学習の取り組みを通して報告した。限定的な活用によって不安を軽減し、自由な発想での活用によって主体性を高めるという二段階的なアプローチが、学習者の AI リテラシー育成を目指す上の第一歩として有効であることが示唆された。今後は、さらなるデータ収集と分析を通じて、より持続可能で実証的な AI 活用の教育モデルを構築していくことが望まれる。

参考文献

Conversation, The (2025, June 26). Canada needs a national AI literacy strategy to help students navigate AI. Retrieved April 21, 2025. <https://theconversation.com/canada-needs-a-national-ai-literacy-strategy-to-help-students-navigate-ai-257513>

LinkedIn News. (2025, March 19). LinkedIn Skills on the Rise 2025: The 15 fastest-growing skills in the U.S. Retrieved April 21, 2025. <https://www.linkedin.com/pulse/linkedin-skills-rise-2025-15-fastest-growing-us-linkedin-news-hy0le/>

UBC Centre for Teaching, Learning and Technology (2024, February). How are UBC students using Generative AI? Retrieved August 18, 2025. <https://ai.ctlt.ubc.ca/how-are-ubc-students-using-generative-ai/>

UNESCO (2024). AI Competency Framework for Students. Retrieved August 17, 2025. <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000391105>

李在鎬 (2025). 「AI とこれからの言語教育」 李在鎬・青山玲二郎 (編) 『AI で言語教育は終わるのか? 深まる外国語の教え方と学び方』 2-18. くろしお出版.

山田智久 (2025). 「AI 使用と教師の意思決定—教師が新しいテクノロジーと出会うとき—」 李在鎬・青山玲二郎 (編) 『AI で言語教育は終わるのか? 深まる外国語の教え方と学び方』 74-90. くろしお出版.